さても、我は三十七歳になりしが、人目はばかる身の上
なれば、廓通いも諦めて、ぬしと湯の香に浸らんと、
連れ立つ嬉野、紅葉の橋にぞ来たりけれ。

令和五年一月十九日

幻想小説家クラブ会員　大中臣正比呂

誕生日の祝いにと訪ねた、加賀の温泉宿の置き雑誌の中に、魅惑の女性の写真があった。夢想の筆は、どうも歌舞伎調のセリフになってしまう。時に、嬉野温泉の嬉野川に架かる橋では、芸者衆が総踊りをしたらしい。佐賀にはカチガラスが生息するので、そこは「小唄　紅葉の橋」のモデルかも知れぬ。渡った向こうには織り姫、いや、壇蜜姫が待っているのだ。唄は、１８７９年に作られた。南北戦争北軍のグラント将軍が、自身の大統領任期を終え、世界旅行の途中で来日した折の、歓迎の小唄である。その返礼にと彼が植樹した松が、東京の増上寺境内にある。この界隈は、江戸歌舞伎の版元が、多く店を構えた所でもある。